

『宋元学案』の総合的研究

連, 凡

Graduate School of Humanities, Department of Philosophy, Kyushu University

<https://doi.org/10.15017/26402>

出版情報：九州大学, 2012, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：



氏名・(本籍・国籍)	レン 連	ボン 凡 (中国)
学位の種類	博士 (文学)	
学位記番号	文博甲第166号	
学位授与の日付	平成25年3月26日	
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人文科学府 人文基礎専攻	
学位論文題目	『宋元学案』の総合的研究	
論文調査委員	(主査) 教授 柴田 篤 (副査) 准教授 南澤 良彦 教授 竹村 則行 教授 岡野 潔	

論文内容の要旨

本論文は、中国清代浙東学派の代表者である黄宗羲・黄百家・全祖望・王梓材・馮雲濠ら多くの編者によって完成された百巻本の宋元儒学思想史である『宋元学案』の文献的価値・思想史観・哲学解釈と評価などについて総合的に解明したものである。『宋元学案』は宋・元二代の儒学思想を体系化し、基本材料・評価基準・思惟方式を提示したもので、この領域を研究するための第一の参考書とすることができるが、前後三段階、百五十年以上にもわたる編纂によって成立しているため、哲学史・思想史・文献資料集の性質を持つ上に、その構成はたいへん複雑なので、現在まで学界ではその内容に関する総合的な研究はなされてこなかった。本論文はこの研究上の空白を埋めようとするものである。

本論文は序論と本論と結論、並びに附録によって構成される。序論では先行研究を整理分析し、本研究の目的・意義と方法・構成について説明した。本論は八章から成る。第一章「『宋元学案』の内容構成とその学術的意味」では、主に『宋元学案』の内容構成（学案・序録・学案表・小伝・思想資料・附録・案語と附録文章）を取り上げ、学案の設立とその学術的意味、序録における宋元思想史の発展脈絡とその要点、学案表と学者の相互関係、小伝の構成と各地域における学術的源流、思想資料と附録の編纂上の特色・得失、編纂者の案語とその学術的意味の六つの面から、編纂の規則とその学術的意味、及び編纂者の思想史観の異同と思想的立場を詳しく検討した。また、各地域における学者の人数と学案上の分布に関して統計を行い、その学術分布と源流を明らかにした。

本論の第二章から第八章までは学案の順序・師伝・地域などの要素を合わせて考えて、『宋元学案』における思想史の構造及び学派発展の脈絡を詳しく検討した上で、思想資料とその原典及び編纂者の案語を分析し、『宋元学案』における主な学派と学者の哲学思想の構造・特質・論点及び編纂者の思想的立場を明らかにした。

第二章「宋学の創立と学派の形成」では、巻一「安定学案」から巻八「涑水学案」下までの内容を取り上げ、歴史上における「道学伝」・「儒林伝」・「文苑伝」の分合、道統論と宋初三先生（胡瑗・孫復・石介）の思想的地位、及び黄宗羲・全祖望の思想史観の異同等を明らかにした上で、宋学の先駆者の思想と学派の形成について検討した。

第三章「北宋五子と道学の確立」では、巻九「百源学案」上から巻十八「横渠学案」下までの内容を取り上げ、宋代道学の創始者「北宋五子」（周敦頤・程顥・程頤・張載・邵雍）の思想に対する解釈と評価を検討すると同時に、蕺山学派の創始者である劉宗周の思想及び編纂者である黄宗羲・黄百家らの思想的立場を明らかにした。

第四章「両宋の間における道学の伝承」では、巻二十四「上蔡学案」から巻四十七「艾軒学案」までの内容を取り上げ、「二程子の直弟子」、「二程子の私淑弟子」、「二程子の孫弟子」に分けて、北宋後期から南宋初期までの過渡期における洛学の伝承（道南学派と湖南学など）と思想を検

討した。

第五章「南宋儒学の隆盛と論争」では、卷四十八「晦翁学案上」から卷六十「説齋学案」までの内容を取り上げ、朱熹と陸九淵を中心として、「東南三賢」（朱熹・張栻・呂祖謙）と浙東学派及び陸学の思想に対する解釈と評価と哲学論争（朱陸異同）を詳しく検討した。

第六章「朱陸の後学と思想界の再構築」では、卷六十三「勉齋学案」から卷八十九「介軒学案」までの内容を取り上げ、朱陸の弟子・後学の思想と評価を検討した上で、南宋中後期の思想界の分化と再構築について明らかにした。

第七章「元代の儒学と朱陸の合流」では、卷九十「魯齋学案」から卷九十四「師山学案」までの内容を取り上げ、元代の北方朱学（許衡と劉因）・南方朱学（呉澄と鄭玉）・陸学（陳苑と趙偕）の思想と評価を検討した。

第八章「党禁と雑学」では、卷九十六「元祐党案」から卷一百「屏山鳴道集説略」までの内容を取り上げ、両宋の治乱興亡と学派の興廃に関わる重大な政治事件「元祐党禁」と「慶元党禁」の経緯とその影響、及び雑学と見なされる洛学の反対者である新学と蜀学とその余波とされる金朝儒学の評価について検討した。

結論では、『宋元学案』の内容構成とその学術的意味、思想史観及び地域学派の展開、哲学思想の解釈と評価の三つの面から、本論文の論点をまとめて明らかにした。

最後に、本論文の論旨を助けるために、附録として、「『宋元学案』における学案と主要人物一覧表」、「『宋元学案』各学案における各地域の人数一覧表」、「『宋元学案』における編纂者の案語一覧表（人物単位）」など七つの図表を付している。

以上、本論文は『宋元学案』における宋元儒学思想史の脈絡にしたがって、『宋元学案』とその原典及び相関的著作をめぐって、理論解釈と統計分析、哲学思想の解釈と歴史文献の分析など各方面の検討を結合することによって、『宋元学案』の内容とその学術的意味と価値などに対する総合的な研究を行った。

論文審査の結果の要旨

上記の論文は、中国近世、宋元時代の儒学思想史に関する代表的著作である『宋元学案』（百巻）について、その文献考証・思想史観・哲学解釈などについて総合的な解明を行ったものである。

『宋元学案』は、明末清初の思想家で『明儒学案』の編纂者である黄宗羲の手抄から始まり、息子の黄百家の編集を経た「黄氏原本」を、黄宗羲に私淑した全祖望が増補修訂するが、さらに道光年間に王梓材・馮雲濠らによって最終的に編集され、ようやく刊行されることになった書物である。このように、三段階、一五〇年以上にもわたって編纂されたため、構成も極めて複雑であり、何よりも対象とする宋元時代の儒学思想史上の人物やその思想が膨大で多岐にわたり、明末に至るまでその評価も変化に富んでいることから、従来この『宋元学案』は研究資料として活用されたり、部分的にその内容が研究されることはあっても、全体的な研究は皆無と言ってよかった。本論文は、その総合的研究という意味で、当該研究史の空白を埋める画期的論考とすることができる。

本論文は序論と本論及び結論によって構成される。序論では先行研究を整理分析し、本研究の目的・意義と方法・構成が説明される。本論は、第一章「『宋元学案』の内容構成とその学術的意味」、第二章「宋学の創立と学派の形成」、第三章「北宋五子と道学の確立」、第四章「両宋の間における道学の伝承」、第五章「南宋儒学の隆盛と論争」、第六章「朱陸の後学と思想界の再構築」、第七章「元代の儒学と朱陸の合流」、第八章「党禁と雑学」の八章から成る。結論では、『宋元学案』の内容構成と学術的意味、編纂者の思想史観、哲学思想の解釈と評価という三つの面から、本論の論点をまとめている。また附録として、本論の論旨を助けるための七つの図表が添付されている。

本論文の成果の第一は、上記のような重層的編集過程と複雑な内容構成について、丹念な分析と解明を行った点である。統計分析の手法を援用して各学案の構成と引用資料を検討するなど、従来になかった文献学的研究が行われており、今後『宋元学案』を利用する者に裨益すること大と言えよう。二番目には、多くの編纂者による案語（評語）を取り上げ、その相互の関係を分析することによって、該書の重層的性格、またそれ自体の思想史的展開を解明した点である。三番目には、『宋元学案』所収の資料と案語を検討しながら、北宋から元末に至るまでの儒学思想史の重要課題について、論者自身が分析整理を行った点である。四番目には、特に全祖望が従来の朱子学的思想史観にとらわれず、歴史の中に埋もれた思想家を発掘して位置付けた功績を具体的に検討し、高く評価した点である。このように、本論文は、『宋元学案』に関して、文献学・学術史・哲学史といった各方面から総合的な研究を行ったもので、従来の当該研究を大きく前進させたものと見ることができる。

むろん、本論文において『宋元学案』に関する全ての問題が解明されたわけではない。多くの編纂者間における思想的異同の問題、また、その社会的・思想的背景としてあった明清代浙東学派との関係、そして『宋元学案』の成立が十七世紀から十九世紀にかけての清朝学术界の動向とどのように関わっていたのかなど、多くの解明すべき課題が残されている。本論文は、今後そうした課題を着実に解決していくための出発点として、確かな研究成果を挙げたものと評価することができる。

以上のことから、本調査委員会は本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つものであると認める。